

2012年
第18回 函館港イルミネーション映画祭
第16回シナリオ大賞受賞作品

函館市長賞
〔グランプリ〕

嘘つき兄さん

函館市長賞
(グランプリ)

「嘘つき兄さん」

齊藤 清貴



齊藤
清貴

【作者プロフィール】

さいとう きよたか

静岡県榛原郡在住。1965年生まれ。2006年イ
ルミナシオン映画祭第十回シナリオ大賞で森達也賞。
2008年NHK創作ラジオドラマ大賞佳作など。

【あらすじ】

自殺で死んだはずの兄と携帯電話で連絡を取りあっている母。そんな母の行動を不審に思った父が、母に無断で、その番号にかけてみると、確かに兄の声。思わず「生きていたのか!」と叫ぶ父。しかし、それは兄になりすましていた、別の男の声だった。なりすました男が自殺しているというその事実をごまかすために嘘八百を並べ母をコントロールしていたのだ。男の真の目的は、母と話すこと。オレオレ詐欺で息子を語って金を振り込ませていた詐欺師は、逆に母性の虜となり、金を返済し、息子になりすまし、母との会話に癒されていた。

男は、兄の偽物として携帯で母とコミュニケーションをとりつつ、私達の住む函館

の街にやってきて近くに住むようになる。そして確実に家族に順応していく。

兄の自殺の原因を、その兄と同じ声を持った男を使って探る、妹の私。しかし、東京に住む、兄の周辺の人間から聞きだした兄の人間像は最低最悪のものだった……。そしてその流れの中で、母と娘は、兄が語っていた言葉が、その愛情を自分に集めるための嘘だったことが明らかとなる。私が、母を敬遠する理由、そして母が、私を遠ざける理由。それは全て兄が源だったのだ。

兄と同じ声をもつ男は、結局、一年かけて、ゆっくりと母から離れていくやり方をとった。母は、そのやり方を自然と受け入れていくしか無かった。そして最後の日が訪れる。母は、携帯電話で、永遠の別れを切り

出す息子に「ありがとう」と言いその言葉を受け入れたのだった。

【人物表】

神波佳代 (20) 父の神波商店を手伝う。亡

くなつた兄を慕っていた。

神波佳苗 (45) 佳代、翔平の母。

神波遼平 (48) 佳代、翔平の父。神波商店

社長。

神波翔平 (21) 佳代の兄。自殺した。

柴田 悟 (22) 元詐欺師。翔平と声が似て

いる。

松じい (75) イカ飯弁当屋。

本庄 (21) 翔平の大学の友人。

○函館港

快晴。

○神波商店

海産物を扱っている卸会社。

電話が鳴る。

娘の佳代が電話を受けている。

佳代「おとうさん・・・」

非常に困惑した表情の佳代。

遼平「クレームか？」

電話を転送で受け取る遼平。

遼平「はい・・・え？ 浦安署って警察で

すか・・・はい。ええ、私が父ですが・・・」

受話器「息子さん、翔平君でまちがいあり

ませんね・・・先ほど、翔平君の部屋で

翔平君と思われる人物が亡くなっている

のが発見されました。死後三日前後たつ

ておりまして・・・お父さんに翔平君か

どうか確認をしていたただきたいので出来

るだけ早くこちらに来て欲しいのです。

詳しい話は、本人確認が出来てからとい

うことをお願いしたいのですが」

意味が飲み込めなく、固まったまま

立ち尽くしている遼平。

遼平「え？・・・あ・・・そこはどこですか？

いや・・・私は、どこにいけばいいんで

すかね？・・・はい、はい。浦安署？

いや、まだ・・・なるべく早く行きます

が・・・」

不安げな表情で遼平を見ている佳代。

遼平、受話器を置く。

遼平「翔平が、死んだかもしれない。行っ

てくる。事務所は、閉めておいてくれ」

うなづく佳代。

事務所を出て、裏の自宅へ向かう遼

平。

玄関から家に入っていく。

○台所

料理の仕込みをしている妻の佳苗。

佳苗「？」

言葉が出せない遼平。

佳苗「どうしたんですか？」

遼平「浦安の警察から連絡があった。翔平

が死んだかもしれない」

佳苗「え！」

遼平「東京へ行こう。すぐ支度を」

佳苗「今朝、話したばかりなのに・・・」

遼平「死後三日とか言ってたぞ」

佳苗「ありえない」

遼平「本当に話したのか？」

遼平「とにかく確認に行こう」

遼平、自分の部屋に向かう。

佳苗、遼平の姿が消えると、携帯を

取り出し『翔平』と表示を出して電

話をかける。

呼び出し音が続く。

緊張している佳苗。

通じる。

佳苗「翔ちゃん」

携帯「どうしたの、母さん」

佳苗「ああ、ああ・・・よかったあ」

向こうから遼平の声が聞こえてくる。

遼平「母さん、ズボンは？」

佳苗「後でかけ直すね」

携帯を切り、遼平の部屋に向かう佳苗。

遼平のズボンをだしてやる佳苗。

佳苗「私、行きませんか」

遼平「なんでだ？」

佳苗「きつと間違いですよ。絶対に間違いですって」

遼平「・・・」

佳苗「飛行機で行くんでしょ。もったいな

いですよ、お金が」

遼平「しかし」

佳苗「早く確認して、私を安心させてください」

着替えおわり、遼平、財布の中身とカードを確認している

○函館空港

ロータリーに入っていく自動車運転している佳苗、助手席の遼平。

ロビー前に停まる車。

遼平、旅行バックを持って黙って空港内へ走っていく。

言葉なく見送る佳苗、すぐに車を発進させる。

○漁港駐車場

車の中から携帯電話をかけている佳苗。

佳苗「もしもし、翔ちゃん。いま、どこにいるの？」

携帯「前も言ったけど、ちよつと面倒なところにいるんだ」

佳苗「警察から電話があったの」

携帯「なんて？」

佳苗「あなたが死んだって」

携帯「ああ、なるほど」

佳苗「どういうことなの？」

携帯「父さんは？」

佳苗「そっちに向かった」

携帯「そっちって？」

佳苗「東京？ 浦安署」

携帯「そうか。どういう状況で亡くなった

って連絡があったの？」

佳苗「自殺だって」

携帯「自殺かあ……」

佳苗「……」

携帯「たぶん本当に死体はあるんだと思う」

佳苗「え？」

携帯「そうか。そうなるのか……まいったな」

佳苗「ねえ、どうなってるの」

携帯「その僕の死体はきつと僕そっくりで、

僕として処理されると思う」

佳苗「どういうこと」

携帯「あるとても力のある人に、僕が頼ん

だんだ。僕の存在自体を消して欲しいっ

て」

佳苗「え？」

携帯「前に言ってたよね、僕。全てから自

由になりたいって」

佳苗「……ずっと前のことじゃない。こ

っちにはもう帰らないとか言い出して、

私を困らせて」

携帯「あの時はごめんね、母さん。でも今

でも、僕の考えは変わってないんだ」

佳苗「そんなこと言わないで」

携帯「母さん、お願いがあるんだ」

佳苗「・・・な、に」

携帯「死体を僕として、そのまま見送って

欲しい。僕じゃない、とかなんとか騒が

ないで、流れに任せて欲しいんだ」

佳苗「え？」

携帯「完全にハメられちゃったな。もう逃

げられないや・・・。母さん、僕はもう

これから別人として生きていく事になる

と思う。色々と悪いことやバイことをさ

せられると思う」

佳苗「お金ならある。なんとかならないの？」

携帯「お金で解決する問題じゃないんだ」

佳苗「・・・」

携帯「大丈夫だよ、母さん。コレつきりじ

やない。関係はこれまでと変わらないよ。

僕も母さんの声を聞かないと寂しくて仕

方ないし。滅多に会えないと思うけど、

電話だけは、今まで通りにしたいと思っ

てる」

佳苗「うん」

携帯「母さん、うまくやって欲しいんだ。

僕の為に。お願いします」

佳苗「・・・わかったわ」

○神波家 居間

佳苗と佳代がいる。

互いに無言の二人。

佳苗の携帯が鳴る。

佳苗「はい」

遼平「・・・翔平だった」

佳苗「・・・そうですか」

遼平「明日、一緒に飛行機で帰る」

佳苗「はい」

遼平「・・・大丈夫か」

佳苗「葬儀屋さんに連絡をいれておきます」

脇で聞いていた佳代、目を見開く。

遼平「ああ、頼む。・・・じゃあ」

携帯を切る佳苗。

佳代「え？ 間違いじゃなかったの？」

佳苗、佳代を無視して自室に向かう。

佳代「母さん」

佳苗、部屋から出ていく。

佳代、自宅の電話から父遼平に電話する。

佳代「父さん、兄さんは」

遼平「ああ、今、一緒にいる。死後4日だ

そっだ」

佳代「嘘！」

叫ぶ佳代。

遼平「本当なんだ」

佳代「だって、だって、母さん、全然落ち

着いてて・・・間違いだって思ってた」

遼平「間違いじゃなかった。母さんのこと

が心配なんだが、様子はどうだ？」

佳代「いつもどおり。私なんか無視。でも、

何か絶対おかしい」

遼平「佳代、お前も辛いだろうが、母さん

の様子も気をつけて見ておいてくれない

か・・・何をしでかすか」

佳代「お父さん、ごめん。私、今・・・ち

よつと無理かもしれない」

半泣きの佳代。

遼平「・・・そっだな。無理言つてすまな

かった」

○葬儀場

遼平の遺影。

遺族席の遼平と憔悴状態の佳代。

お焼香する友人たちに頭を下げてい
る遺族。

受付をしているの遼平の友人達が話
している。

友人1「奥さん、いないな」

友人2「遺体を見ようともしないそうだ」

友人1「そういうものなのか？」

友人2「どうなのかなあ。わかんねえよ。

ただ、まあ、遼平は大変だよな」

○神波家自宅

自室で携帯で話している佳苗。

佳苗「怖いよ。だって、翔ちゃんじゃな
い別の人が翔ちゃんとしてお棺に入つて
るなんて……その別の人が可哀想だし、……
本当に怖い」

携帯「母さん、ごめんね。まさか僕もこん
なふうになるなんて思ってたなくて。でも
骨くらい拾ってあげてもいいと思うんだ
けど、どう？」

佳苗「無理。絶対に無理。だって、全然関
係ない人なんですよ。それに犯罪に手
を貸してるみたいですから怖い」

携帯「そうだよね」

佳苗「……会いたい、翔ちゃん」

携帯「うん。僕も会いたい」

佳苗「どうして会えないの？」

携帯「僕はもう犯罪者なんだ」

佳苗「でも、まだ悪い事してないでしょ」

携帯「してる。もう逃げられない」

佳苗「・・・」

携帯「母さん、ごめん。仕事だ。切るね。」

明日また電話してね。これくらいの時間

だと僕も空いてると思うよ」

切れる携帯。

気分が悪くなりベットに潜り込む佳

苗。

思ってたんだ」

佳代の言葉を無視して空を見上げる

遼平。

佳代「私が、別の所の子だったら良かった

のについて思ってた」

遼平、佳代の顔をチラッとみるがや

はり無視する。

佳代「なにが理由なの？」

遼平「知らん」

佳代「納得いかない」

遼平「俺もだ」

佳代「誰かに殺された、って方がまだ納得

できる」

遼平「うん」

佳代「兄さんが東京に行って、家の中がな

んかおかしくなったよね」

○火葬場

待合室から出てくる遼平と佳代。

煙を哀しげな表情で見ている佳代。

佳代「私、兄さんと結婚したいってずっと

うつろな目になる遼平。

佳代「私と母さんと父さんの真ん中において、みんなをバランス良くまとめていたのが兄さんだった」

遼平「そうだな」

佳代「・・・きつともうすぐバラバラになっちゃうよ、うち」

遼平「仕方ないさ」

佳代「いいの？」

遼平「佳代は、誰かの嫁さんになって、うちから出ていくからいいだろ」

佳代「わたし、家を継がなくていいの？」

遼平「どうでもいいさ。お前がしあわせになれるのなら・・・この家においても、楽しくないだろ」

佳代「うん」

遼平、自虐的に笑う。

遼平「翔平さえいれば、俺ら夫婦の未来もなんとかなるって思ってたんだがな・・・」

○松じいのイカ飯工房

小さな料理工房。

松じいが、婆さんと二人でイカ飯弁当を作っている。

遼平が、顔を出す。

遼平「持つてくよ。三十だよな」

手を上げて了解の合図の松じい。

机の上の三十個のイカ飯弁当を運び出す遼平。

ボックスタイプの軽自動車に弁当を積み込む遼平。

中から婆さんが出てくる。

婆さん「奥さんどうかね」

遼平「・・・結局、以前と変わってないんですよ」

婆さん「葬式の時、あれだけ部屋にこもりつきりだったのにか？」

苦笑の遼平。

苦勞させられると思つてましたからね、こつちも」

婆さん「なら、いいけど」

遼平「心配かけて申し訳ない」

婆さん「あのさ、実はさ・・・今年いっぱいで辞めようかと思つてるんだが」

遼平「へ？ 何を」

婆さん「イカ飯」

ついに来たか、という顔の遼平。

遼平「・・・そうすか」

婆さん「悪いね」

遼平「いやあ・・・今まで、松じいのイカ飯には随分助けてもらったから。感謝の言葉しかないです」

○神波家 佳苗の部屋

携帯で話している佳苗。

佳苗「でも翔ちゃん、新しい名前とかあるんでしょ、教えてよ・・・駄目なの？

アハハ、そつかさうだよね」

× ×

佳苗の部屋の前で盗み聞きしている佳代。

× ×

佳苗「翔ちゃん、会いたい・・・わかつてる。」

× ×

ええ、だって・・・うん、そうよね」

× 穏やかで幸せそうに話している佳苗。

×

険しい表情で会話を盗み聞きしている佳代。

○神波商店 事務所

外回りから帰ってくる遼平。

佳代が待っている。

遼平、佳代の険しい表情に気がつく。

遼平「何かあったのか？」

佳代「ちよつとね」

遼平「なんだ？」

佳代「母さん、なんか変」

遼平「・・・そうか？」

佳代「母さんを見てると、なんだか兄さん

がどこかで生きてるみたいな気がするの」

遼平「馬鹿なことを言う」

佳代「でもそう考えると、いろいろと思

当たることあるでしょ」

しばし、考える遼平。

遼平「ない」

佳代「母さん、冷静すぎると思わない？」

遼平「まあ、そうかな」

佳代「さつき、母さん、部屋で携帯で誰か

と話しながら大声で笑ってた」

遼平「へえ・・・それは珍しい」

佳代「悪いと思ったけど、ちよつと盗み聞

きしちゃった・・・そしたら、『翔ちゃん』

とか何とか言ってる・・・まるで、兄さ

んと話しているみたいなの雰囲気」

遼平「・・・」

佳代「あの死体、本当に兄さんだった？

わたし、ちゃんと見れてないから、確信
がもでないけど、本当に兄さんだった？」

遼平「あ、ああ。間違いないよ。まあ、俺も、
ちゃんと見たのは警察の死体安置所だけ
だけど、葬儀ん時は、友達とか親戚のみ
んなも見てるしなあ」

佳代「母さん、見てないでしょ」

遼平「見てないよ」

佳代「愛する息子を前にしてあの態度、お
かしくない？ でも、あれが身代わりか
なんかの死体だったら、納得いくんだけ
ど」

だんだん興奮してくる佳代。

相手にしてない遼平。

佳代「父さん」

遼平「勘弁してくれよ、佳代」

佳代「一つだけ。一つだけ聞いて」

遼平「なんだ」

佳代「母さんが毎日、誰に電話して笑って
るか、それだけ知りたい。っていうか、
それが兄さんじゃないってことだけ知り
たい。それだけでいい。調べて欲しい」

遼平「どうやって？」

佳代「母さんの携帯の履歴を見るだけ。そ
れだけ」

遼平「見るだけだぞ、誰にかけているか」

佳代「母さんの携帯の暗証ナンバーは、き
つと兄さんの誕生日の11112だと思う」

○風呂

佳苗、風呂に入っている

○佳苗の部屋

入ってくる遼平。

机の上にある充電スタンド上の佳苗の携帯電話を手に取る遼平。

暗証ナンバーを打ち込み、ロックを解除し履歴を確認する。

発信履歴が『翔平』の文字で埋め尽くされている。

表情がこわばる遼平。

そして、発信ボタンを押す遼平。
携帯の発信音が鳴る。

携帯「どうしたの、母さん。こんな時間に」
驚愕の表情の遼平。

携帯「何かあったの？」

遼平「翔平、生きていたのか？」

声が震えている遼平。

携帯「・・・」

遼平「ああ、良かった・・・なんていった
らいいのか・・・ああ」

携帯「父さんなの？」

遼平「どこにいるんだい？」

優しい声で語りかける遼平。

携帯「母さん、近くにいますの？」

遼平「母さんは風呂に入っている」

携帯「父さん、二人で会いたいんだけど、

いいかな」

遼平「ああ、いいとも」

携帯「二人だけだよ。母さんには内緒で会
いたいんだ」

遼平「どういうことだ」

携帯「会えばわかる、父さんの携帯番号を
教えてもらえないかな。後でこちらから

連絡する」

遼平「090、7878の・・・」

携帯「絶対に、母さんには知られないようにしてね」

遼平「気をつけるよ」

遼平、発信履歴を消して、そして部屋の外に出る。

その時、自室に置いてある、自分の携帯から呼び出し音が発せられていることに気がつく。

遼平、慌てて部屋に入る。

そして携帯に出る。

携帯「もしもし」

遼平「翔平か？ 私だ」

携帯「明後日の3時、函館駅の待合ロビーに

行きます」

遼平「帰ってくるのか？」

携帯「行きます。母さんにはバレてませんよね」

遼平「大丈夫だ。明後日の3時、函館駅だな」

携帯「それじゃあ、明後日に」

携帯、切れる。

しばし、携帯を見つめている遼平、人の気配に、ハッと振り返る。

目をうるませた佳代が立っている。

佳代「やっぱり兄さんだったの？」

○函館駅

緊張した面持ちで待っている遼平。

離れたところで見ている佳代。

約束の時間から5分過ぎている。

不安げな表情の二人。

遼平の携帯が鳴る。

遼平「もしもし」

携帯「もしもし、僕です」

遼平の5メートルほど先に、一人の

若い男が携帯片手に立っている。

悟「もしもし僕です」

遼平、電話の相手がその男だと気が

つく。

男、携帯をおろす。

そして遼平に向かって深くお辞儀を

する。

しばし、呆然とその男を見ている遼

平。

近づいてくる男。

遼平「誰だ、お前は？」

佳代が異変を感じてやってくる。

遼平「誰だ？」

悟「翔平君に声が似ている男です。柴田悟

といいます」

遼平「翔平は？」

悟「お亡くなりになったと聞きました」

遼平「君は、いったい何なんだ」

悟「翔平君に声が似ている男です」

佳代「父さん、この人は？」

悟「あの・・・静かに話せるところに行き

たいのですが？」

遼平「ちゃんと説明してくれるんだろうな」

悟「はい。全部話します」

遼平、携帯を取り出す。

遼平「幸雄か？ ちょっと場所貸して欲し

いんだが、いいかな・・・今から行く」

携帯を切り、歩き出す遼平。

遼平についていく悟と佳代。

佳代に話しかける悟。

うなづく佳代。

悟「柴田悟といます。22歳です。職業は、

今はありません」

○スナック「サチ」

狭い階段を上がっていく三人。

黙って聞いている遼平と佳代。

暗い店内に入っていく。

悟「最初に、言っておかなければならない

幸雄「いらっしやい」

話があります。基本、僕は嘘つきです。

遼平「悪い幸雄、三人だけにしてもらえな

放っておくと、ほんとうにくだらないう嘘

いかな」

から、重大な不利益を与える嘘まで、あ

幸雄「ああ、わかった。1時間したら戻っ

ることないこと吹きまくりです。今は、

てくるから、それまでな」

嘘はつくまいという決心してここに来て

うなづく遼平。

いますが、苦しくなったらまた嘘をつい

出ていく幸雄。

てしまうかもしれません」

遼平と佳代、並んで座る。

佳代「それじゃあ、母さんを騙しているっ

その対面に座る悟。

てことは認めるのね」

悟「佳代さんですか？」

悟「はい」

佳代「どうして、死んだ人間になりすましているの？」

何か、話し出そうとして、自分で自分の頬をきつく叩く悟。

その音の大きさに驚く遼平と佳代。

悟「すみません」

つらそうに話しだす悟

悟「ぐっ。うう。・・・で、ですね・・・。

すみません・・・。お母さんの声が、僕の知ってる人の声と似ていて、それで、ああ、この人ともっとずっと話していたいな、と思っただんです」

瞬間、椅子の台座のところガツ掴み、

激しく何かを我慢する動きを取る悟。

遼平「どうしたんだ？ 大丈夫か」

悟「大丈夫です。具合が悪いわけじゃないんです・・・すみません」

大きく息をついて話しだす悟。

悟「最初は、あれでした。あれじゃ、わかりませんよね。・・・一年前、僕、オ、オレオレ詐欺をやってたんです」

ガタガタガタとイスが音をたてるくらい激しい痙攣。

悟「すみません。真実を話すことを躰が拒否してるんです。でも、今は正しい事を言っておかないと、良くないので・・・すみません。今まで嘘ばかりついてごまかしてばかりいて、目の前の人を怒りそうなのが言えない体質で・・・」

遼平「いったい、君は何をいってるんだ」

佳代「この人、自分で自分の都合の悪いこ

とを話そうとすると、躰が拒否反応を起
こすって言うてるんだと思う。で、普段は、
自分の嫌なこと言わなければいけないな
ったら嘘ついてごまかしてるって」

佳代の顔を不思議な表情で見る父。

佳代「でも今から頑張って本当のこと言
います、って言うてる」

父、悟の顔も見る。

つらそうに頷く悟。

悟「僕は、オレオレ詐欺やってたんです。
電話かけて、まあ大概はお年寄りだつた
りしたんですけど、うまいこと言って、
上手に騙してお金を振り込ませてました」

遼平「それ犯罪だよな」

悟「はい」

遼平「捕まった？」

悟「いえ」

遼平「・・・うちのかみさんからは、いく
ら振り込ませた」

悟「とりあえず百二十万。一ヶ月後、さら
に三十万円」

遼平「知らないぞ、そんな金の出入りは・：
へそくりか」

悟「でも、全部返しました」

遼平「?・・・君がか?」

悟「グループ抜けて、それから、自分で働
いて、自分で稼いで、返しました」

遼平「?」

佳代「母さんと話したかったから?」

首を縦に振る悟。

遼平「はあ? 犯罪がバレたから、という
ことじゃなくか?」

再び、ガタガタガタとイスが揺れる。

歯を食いしばっている悟。

悟「やってたことがバレたとかじゃなく、……ただ返したかったから……うううう、くっ！……返さなければいけなかったから……自分の為に」

遼平「自分の為？」

悟「この人を裏切ったら、自分は終わると思ったから……違う！」

小さく叫ぶ悟。

大きく何度も息をつく悟。

悟「……す、きだったから。お母さんのことが好きだったから……詐欺団を抜けてから電話したんです。声を聞きたくて……そしたら、お金大丈夫？二十万ならすぐあるわよ、って言うてく

れて……もう大丈夫だよ、逆に七十万円送り返すからね、って言ったら凄く喜んでくれて、本当に喜んでくれて、その喜ぶ声が聞きたくなって一週間後に持ち金ほぼ全部の三十万円。翌週からバイトして稼いだ金を一万五千円づつ毎週月曜日に振込み続けて返しました」

遼平「それが出会いか……話を戻すが、その時、君はうちの息子の翔平として振舞っていたんだな」

悟「そうです」

遼平「翔平を知っているのか？」

悟「全く知りません」

父「じゃあ、どうやって佳苗を騙したんだ。

君と翔平とは、声が似ているだけだろう」

遼平「オレオレは、あれなんです。勝手に

騙されてくれるんです。電話口で、ちょっと困った声で『僕だけど』って言えば向こうが勝手に『翔平？ どうしたの？』って言うってくれるんです。声が似てなくても、風邪をひいたとか言えば問題ないです。で、口ごもって間を開けたりすると、向こうが勝手に『お金、困ってるの？』とか『帰ってくれば？』とか言うってくれるんです」

遼平「そんな、簡単なわけ無いだろうー！」

悟「勝手に騙されてくれるのは、心に穴のあるやさしくてそして寂しい人です。やましいことがあったり、愛する孫や子供に頼りにされてなくて悲しい思いをしている人です。普段からずっとずっと、いつもいつも愛する人の心配しているから、

電話先の人間がその愛する人だと思ったら、もう一気に魂を持っていかれます。カモがひつかかれば、こっちもすぐわかります。言葉の熱が違いますから。騙すとか騙されるとかじゃないんです。それは魂から発せられた、しかもあなたを助けるから、私も助けてくれ、という心の奥底からの叫びなんです」

佳代「汚い！」

佳代、怒りに我を忘れて叫ぶ。

悟「ごめんなさい。・・・ごめんなさい、ごめんなさい」

顔面蒼白になって、謝りだす悟。

悟「ごめんなさい・・・本当にごめんなさい」
何度も頭を下げて、そして机に頭をすりつける悟。

父「わかった。もういい」

自分の言葉の威力に、少し動揺気味の佳代。

父「じゃあ、金を返すたびに話していたんだ、ウチのやつと」

悟「そうです・・・楽しかったです」

父「佳苗は、君のことを完全に翔平と思い込んでいたんだね」

悟「思い込みたかったです。そして今も思い込んでいる。この間も、あなた死んでなんか無いわよね、つと言われた気がして、思わず死んでないよって言っしまつて、後はもうその嘘を嘘でごまかし続けてて・・・自分でとんでもないことをしでかしてるのはわかってました。でも辞められない。母さんが不安になって

僕に電話してくれるたびに、僕は僕で母さんを安心させてあげなければって、もうこの口で自然とあることないことを吹きまくってしまつて・・・どうしよう、どうしようって思つてる時にお父さんから電話があつて・・・すがる気持ちでここに来ました」

遼平「・・・」

悟「自分のしでかしたことの罪の重さはわかっていきます。ただ・・・なんとか、うまく、翔平君の死を、お母さんに、うまく伝えなければいけない。うまく伝えられないと・・・最悪のことになつてしまふかもしれない。そんな恐ろしいこと、想像したくも無いですけど、でもそれが怖くて、ズルズルとここまで来てしまつたんです」

遼平「わかった。佳代、どうだ」

佳代「正直に話すしかないと思う」

遼平「君はどう思っている」

悟「・・・一番いいのは、ゆっくりとあいだをあけて、一年ぐらい時間をかけて離れていくのがいいと思ってます」

佳代「そんなやり方なら、自分一人で出来たんじゃないの？ わざわざここまでこなくても」

悟「お母さんと話していると、僕も楽しいから・・・とてもそんなこと出来ません。僕のベストはお母さんが死ぬまで一生、騙し続けることです。今でも許されるならそうしたいと思ってます」

遼平「・・・確かにそういう手もあるな」

佳代「父さん、何言ってるの？」

遼平「変かな？」

佳代「変よ」

遼平「でも母さんもこの男も、ある意味ず

っと幸せなんだぞ」

佳代「・・・でも、よくない」

首を激しくふる佳代。

悟「僕も良くないと思います」

苦笑する遼平。

悟「君は、本当に、こうなんていうか、口がよく回るね」

悟「すみません」

佳代「それに謝ってばかり」

悟「すみ・・・」

佳代「ほら」

自虐的に笑う悟。

遼平「一番いいのは、時間をかけて離れて

いってフェードアウトしていくという方法か」

佳代「でも、難しいって。だって、この人、母さんと楽しくて仕方ないんですよ」

うなずく遼平。

遼平「君はどう考えているんだ」

悟「監視つきなら、うまくやれそんな気がするんです」

遼平、佳代、不思議そうな顔で悟を見る。

悟「お父さんに監視されながら、ここで暮らしながら、近くで母さんの顔色を見ながら、ゆっくりと離れていくのがいいんじゃないかと。そうすれば間違いが起くる確率が少なくなるんじゃないかと」

遼平「仕事は？・・・そうか無職って言う

てたな。家は？」

悟「昨日、全部解約してここに来ました」

佳代「まるで何かから逃げてるみたい」

悟「転入届け、神波商店の住所を移転先に
して持って来ました。借金取りとかから

逃げてたら、こんなことしません」

遼平「お前、準備が良過ぎないか」

悟「なんとかうまく、自分のしでかしたことを無事におさめたんです」

佳代「それに母さんの近くに来たかった」

悟「・・・それもあるかもしれないです」

遼平「仕事は何を考えている」

悟「特に」

遼平「希望は？」

悟「なるべく人と話さないような仕事を考えてます」

遼平「営業とかあいそうだけどな」

悟「最初はいいんです。でも嘘つきまくるんで、最後は滅茶苦茶になって破綻します」

遼平「なるほど」

佳代「松じっちゃんのところは？」

遼平「・・・言うの忘れてたが、松じい今年いっぱいで辞めるって」

佳代「ええ！」

しばし考えこむ遼平。

遼平「まあ、聞いてみるか」

立ち上がる遼平。

遼平「どこに泊まる？ さすがにうちに泊まらせるわけにはいかんぞ」

悟「ホテルの安いところにしばらくいます。

仕事が決まったら部屋さがします」

頷く遼平。

佳代、立ち上がる。

佳代「じゃあ、行きましょう」

悟「え？ どこに」

佳代「松じっちゃんところ。たぶん働けるし、空いてる部屋が三つくらいあるから泊まれるし。問題は、松じっちゃんと相性が合うか合わないか」

外に歩き出す佳代。

ついていく悟。

○市内 路上

歩いて行く佳代とついていく悟。

佳代「私、騙されてないわよね」

悟「今は騙してません。・・・でも、今後も気を抜かないでもらえますか。僕は、本

当に平気で嘘をつける人間なんで。いつ、嘘が始まるかわからないんで。．．．でも、嘘って必ずいつかバレるから．．．本当はつきたくないんですけど．．．」

佳代「なんか、めんどくさいね」

悟「すみません」

佳代「また謝る！謝らなくていいよ。もうさ、騙されたらこっちが悪いってことでいいじゃない」

悟「それは駄目ですよ」

佳代「どうして？ あなたが嘘をついたら、

この不思議な関係が終わるかもしれないなんて寂しいじゃない。嘘ついて、それが後で都合が悪くなったら謝ってくれればいいよ。少なくとも、私たちは、そういうゆるい関係にしておこうよ」

悟「．．．ありがとう、ございます。ちょっと楽になりました」

佳代「それから．．．その敬語、やめてくれるとうれしいかも」

悟「．．．わかった。やめる．．．これで

いいですか、じゃなくて、いいですか？」

微笑んで、うなずく佳代。

悟「なんか、佳代さんは印象が違いますね」

佳代「また敬語になってる」

悟「すみません」

佳代「謝らない！」

悟「．．．」

佳代「印象違うって？」

悟「お母さんの話と」

佳代「仲良くないから、私と母さん」

悟「どうして？ あんな優しい人なのに」

佳代「・・・母さんが、優しいのは兄さん

だけなのよ」

悟「そうなんだ」

佳代「まあ、母さんにもいろいろな事情が

あるかもしれないんだけどね」

悟「事情って？」

佳代「私が嫌いなのも仕方ないのかなって」

悟「どうして嫌われちゃったの？」

佳代「・・・秘密。でも私はなんにも悪い

事してないし、たぶん母さんもしてない、

と思う」

悟「複雑そう」

佳代「シンプルな話なんだけどね」

悟「・・・」

佳代「着いたよ」

○松じいのイカ飯工房

自分の家のように中に入ってくる佳

代。

佳代の後ろから入ってくる悟。

婆ちゃん「ああ、来た来た。その子かい、

住み込みで働きたいっていう今時珍しい

子つてのは」

佳代「父さん、電話したの？」

婆ちゃん「よろしくって」

悟、頭を下げる。

悟「よろしくお願いします」

婆ちゃん「こちらこそ」

佳代「バイト代どれくらい出せるの？」

婆ちゃん「逆に聞きたいんだけど、今、相

場ってどんなもんなの」

婆ちゃんと条件について話はじめる

佳代。

悟、奥の方に入っていく

大きな作業台に大きなカマ。

作業場の掃除をしている松じい。

悟「よろしくお願ひします」

片手で無愛想に合図をする松じい。

佳代「じっちゃん、よろしくね」

佳代が作業場に入ってくる。

松じい、笑いながら、手でオツケー

の合図を佳代に向ける。

○悟の部屋

古く狭い部屋に案内される悟。

荷物を置き、一息つく悟。

携帯電話のバイブが鳴る。

悟「もしもし」

佳苗「あー、やっと通じた」

悟「今まで仕事をしていたんだ」

佳苗「疲れてない？」

悟「ちよつと疲れたかな」

佳苗「じゃあ、そんなに話せないね」

悟「函館は変わった？ もう僕が出てきて

から3年経ってるけど」

佳苗「3年じゃ、何も変わらないわよ」

悟「今日さ、松じいに似た人にあつて懐か

しいつて思ったんだ」

佳苗「元氣よ。相変わらず愛想なくて。で

も今年いっぱい店でたたむんだって。

もつたない」

悟「そうなんだ。もつたないね、それは」

佳苗「そうよ需要はあるのよ。松じい印の

イカ飯は函館一しよっぱいイカ飯で、お

酒のつまみに最適なのよね」

○イカ飯工房

作業場。

イカの内蔵を取り出ししている松じいと婆ちゃん。

見学している悟。

× ×

大きなカマで煮こまれているイカ飯。作業の過程をしつかりとみている悟。

○堤防

カモメが集まって来ている。

堤防に腰掛けて話している悟と佳代。

佳代「婆ちゃんがびっくりしてたよ」

悟「何が？」

佳代「ほとんど話さないんだってね、悟君」

悟「そうだね。・・・あの人、僕になんにも

期待してないから。楽でしようがない」

佳代「？」

悟「だからね、僕は期待されちゃうとそれに合わせようと頑張るんだけど、すぐ飽きちゃって頑張れなくなつて、それをごまかすために嘘をつき出してグダグダになつちゃうんだ。でも期待されてないから、言い訳する必要ないし、話す必要もないし」

佳代「ああ、そういう流れなのね」

悟「見てるだけでいい、っていうから見るだけ。でもボーっと見てるわけじゃないよ。いつ、作ってみる、と言われてもいいように真剣に見てるんだからね」

しゃべる悟を見て、自らを省みる佳代。

佳代「・・・私、喋りすぎてる？」

悟、いきなり自分の頬をはたく。

びっくるする佳代。

佳代「何!どうしたの?」

悟「今さ、別に喋りすぎじゃないよ、って

いいそうになって、でもそれって嘘だから

ら思わず頬を叩いた」

呆れる佳代。

佳代「それくらいのことだ」

悟「僕にとつては大切なことなんだけどもな」

佳代「・・・よく、わかんないな」

悟「だから、今後、時々いまみたいな自分

ツッコミがでるかもしれないけど、黙っ

てスルーしてもらえると助かる」

佳代「わかった。今みたいになったら、あ

あ、嘘つきそうになったけど我慢したん

だ、えらい、って思ってたあげばいいのね」

悟「あはは。そうだね」

○松じい自宅

帰ってくる悟。

婆ちゃんが迎えに出る。

婆ちゃん「デートかい?」

悟「たぶん僕はお兄さんの代わりですね」

婆ちゃん「ああ、そうか。あの子、お兄ち

ゃん大好きだったから」

悟「どういう人だったんですか、翔平さんて」

婆ちゃん「良い子すぎる子」

悟「良い子ですか」

婆ちゃん「あそこは、ほら、奥さんの気が

強いところに来て、いろいろゴタゴタもあつて・・・それを翔ちゃんが全部引き受けてたから」

悟「ゴタゴタ？」

婆ちゃん「わたしんところを継いでくれるって約束したら教えてあげるよ。この辺のご近所情報も全部まとめて」

× ×

イカ見よう見まねでをさばいている悟。

首を横にふつて、ダメ出しの松じい。

同じ動作を繰り返す悟。

悟の手つきの良さに、感心そうにならずく松じい。

× ×

釜にゆつくりとイカ飯を入れている

悟。

後ろから様子をみて、まだまだ駄目だな、という表情の松じい。

○神波家 台所

遼平と佳苗が食事している。

佳苗「松田さんのところ、若い子を雇ったって聞いたんだけどあなたが紹介したんですって？」

遼平「ああ」

佳苗「どこの子なの？」

遼平「東京」

佳苗「？」

遼平「翔平の家を片付ける時、向こうで世話になったんだ。冗談で、仕事ならあるぞ、って行ったら来ちゃったんだ」

佳苗「え？」

遼平「なんか、北海道で一度暮らして見た
かったとか言ってるな」

佳苗「それじゃあ・・・翔ちゃんのお友達

なの？」

遼平「まあ、そうかな。俺もまだ詳しい話
は聞けてないからわからんが」

佳苗「・・・どうして今までそのことを私
に黙ってたの？」

遼平「何が？」

佳苗「だって翔ちゃんのお友達でしょう」

遼平「翔平の話になると、いつも気分悪そ
うにしてたから遠慮してたんだが」

複雑な表情の佳苗。

佳苗「それで、どんな子です？」

遼平「変わった子だね。あの松じいとうま

くやってる。普通の子じゃありえないん
じゃないか？」

うなずいている佳苗。

○松じいの家 悟の部屋

携帯で話している悟。

佳苗「柴田悟って子知ってる？」

悟「え？・・・ああ、うん。思い出した」

佳苗「今ね、彼、函館に来てて松じいのと
ここで働いているのよ」

悟「へえ。でも長くは続かないだろうね」

佳苗「それがね、松じいと、すごく上手に
つきあってるらしいの」

悟「へえ、あの人とうまくやるなんて、意

外だなあ」

佳苗「どんな人なの？ その柴田くんて」

悟「短期バイトで一緒になったんだ。家が近かったから時々飯を食ったり飲みに行ったりしてたかな。一見、人当たりが良さそうに見えるけど、実はかなり性格が歪んでてね。．．．そんなところが、どこか僕に似てたよ」

佳苗「彼も、歪んでるの」

悟「父親を憎んでたなあ。実力以上のプレッシャーをかけてきて、人間として潰されかけたらしい。だから、そこから必死になって逃げ出してきたんだ、って言った。でも大学も出てないし、手に技術をもってるわけでもないし．．．人を騙すような仕事をしてた時もあったようであらう。荒んでたなあ。立ち直れたのなら、うれしいな」

佳苗「彼に、あなたのこと話したら駄目？」

悟「あいつだったらいいよ。僕の秘密を知ってるし、他にしゃべることもないだろうからね」

○松じいの工房

松じいが飛ばす小さく鋭い指示に、
従っている悟。

次々とイカ飯が、弁当箱に収められていく。

手際の良い悟。

× ×

仕事を終え、休憩している悟。

婆ちゃん「悟、佳代ちゃんが、あんたを来週一週間貸して欲しいっていつてきたんだけど、聞いている？」

首を横にふる悟。

婆ちゃん「何なんだろうね？ まあ、こつ

ちはなんとでもなるからいいけど」

そこにやってくる佳代。

婆ちゃん「噂をすれば・・・」

悟に、ちよつと来い、と手招きする

佳代。

悟「ちよつと行ってきます」

○海岸の堤防

堤防に座っている二人。

カモメが数匹、砂利浜を歩いている。

佳代「一緒に、東京に行つて欲しいのよ。

一週間」

悟「・・・何しに？」

佳代「・・・兄さんの自殺の理由を知りた

くて。友達だった人とか、お世話になつ

た人、バイト先、聞いて回りたいの」

悟「男だよ、俺」

佳代「お父さんに話したら、いいよ、って」

悟「信用されてるんだね」

佳代「お父さんの中じゃ、兄さんと同じカ

テゴリーの中に入ってるのかもしれない

ね。私もそうだけど」

悟「俺なんか、邪魔になるだけだよ」

佳代「そんなことない。だって東京育ちの

人だから東京が詳しいに決まってるし、

男だから頼りになるに決まってるし、電

話を通すと兄さんと声が一緒だから、何

か人を騙して本音を聞きだせるかもしれ

ないし、嘘つくのがうまいから、真実を

聞き出すのに役立つかもしれない。ねっ」

悟「・・・根回し、完璧だね。お母さんは

知ってるの？」

佳代「母さん、私のこと別にどうって思っ
てないから問題無いわ」

○松じいの工房

作業場の後片付けをしている悟。

入り口に人影。

佳苗が立っている。

しばし、佳苗を見つめている悟。

あまりに強く見つめられて、少し後

ずさる佳苗。

佳苗「佳代の母です」

しかし、佳苗を見つめる目は離れな

い。

佳苗「柴田さんですよね」

悟「はい」

声を低くして話す悟。

佳苗「来週、うちの娘と東京に行くんです
って。よろしくお願いしますね」

悟「はい」

視線は相変わらず佳苗の顔にロック

オン状態。

佳苗「あの、私の顔に何かついてます？」

悟「いえ。昔お世話になった人に、顔も声

もそっくりだったもので、つい我を忘れ

てしまつて。ごめんなさい」

佳苗「気にしてないから。それじゃあ、娘

をよろしくお願いします」

出ていく佳苗。

○飛行機内

並んで座っている悟と佳代。

佳代「東京に行こうとしたきっかけは、兄さんの携帯電話を解約するってお父さんが言ったことなの。携帯、とつくに処分してたと思ってたから。それで履歴を見てたら、この人達に話を聞いたら、きつと兄さんの苦悩もわかるんじゃないかな、と思つたの」

悟「僕は何をすればいいのかな？」

佳代「執事、みたいな感じ」

悟「お嬢様、みたいな扱い？」

佳代「そうそう」

悟「昨日、初めて会った。お母さん本人に」

佳代「どうだった？」

悟「子供の頃に世話になったおばさん、そ

っくりでき。心がタイムスリップした感じだった。懐かしくて懐かして・・・」

佳代「どんな人だったの？ そのおばさんって」

悟「うちは父親がきつくてさ、勉強できないとマジでぶん殴られる家だね。母親も親父には逆らえなくて・・・ギスギスしてたな。よく、晩飯抜きで外に放り出されてさ、その時さ、向かいの家の独身のおばさんが優しくしてくれてさ・・・」

佳代「それがうちのお母さんかもしれない、という話じゃないわよね」

悟「似てるけど、年齢が違うって。十五年前で50歳前の人だったから」

佳代「なあんだ」

悟「親父とお袋、今なにしてるんだらうなあ」

佳代「会いに行かないの？」

悟「勘当されたし、お金も持ち逃げしてき

たから、もう会いにいけないなあ」

佳代「何をしでかしたのよ」

悟「大学受験でさ、高校3年の時から、い

ろいろと仕込んだんだ。全国模試とか全

国で百番くらいの成績表を捏造して、信

用させて、本番の受験では、京王の医学

部に受かったって嘘ついて、入学金やら

学費を懐にいれちゃったんだ」

佳代「すぐばれるでしょ、そんなの」

悟「2年次の学費を俺の口座に振り込んで

もらったところで、こっちから教えてや

ったんだ。お前のバカ息子は、たんなる

プー太郎だってね。信じられない、って

いうあの時の、親父のアホづらは本当に

忘れられないよ。三年がけの大掛かりの

嘘だった」

佳代「どうしてそんなことしたの？」

悟「頭悪い奴は、俺の子じゃない！ってい

って殴り続けられたらね」

佳代「それが悟君の原点なのね」

悟「原点じゃなくて、最高点だね。あの後、

どうなってもいいって、本気で思ってい

たもんなあ」

しばし沈黙の佳代。

悟も、何か考え込んでいる。

佳代「ちよつと深い話をしていい？」

悟「どうぞ」

佳代「どうして、母さんは私のことが嫌い

なのか知ってる？」

悟「子供の頃、お母さんの悪口ばかり言

つてたから」

佳代「私が？ 言うわけ無いじゃん」

悟「前に聞いたことあるよ。あの娘は陰口が多すぎて困るって」

ため息の佳代。

佳代「そう言つて、私のこと悪く言うのよね、

あの人は」

悟「違うの？」

佳代「兄さんが教えてくれたの」

悟「うん」

佳代「私は、母さんの子供じゃないって」

悟「・・・」

佳代「母さんにはお姉さんがいて、私が産

まれた頃にガンで亡くなったの」

悟「うん」

佳代「その人が、私のお母さんらしい」

悟「父親は？」

佳代「謎。でももし、うちのお父さんじゃなかったら、遺伝的には俺たち結婚できるんだよな、つて兄さん言つてた」

悟「また突拍子もない話を」

佳代「当時、うちは借金だらけで、そのお姉さんはどうしても自分の血が直に流れた子供を、養子じゃなくて実子として神波家に入れたがついていて、それを条件に、お父さん個人に、かなりの資金を援助したんだつて」

悟「生々しい話になってきた」

佳代「なんか信じがたい話なんだけど、そう考えると腑に落ちることがいっぱいあつて」

悟「うん」

佳代「そしてね、そう思ったら、随分楽になれたの。だって、私が母さんから可愛

がられない理由も、父さんもなんか遠慮して理由もじっくりくるから」

悟「そうか。逆に楽になれるんだ」

佳代「だ、か、ら、死んだと思った兄さんが生きてるかも、って聞いた時は、私と結婚するための、裏ワザかなんかかもしれないってちよつとだけ期待してた」

悟「で、僕が現れて幻滅した、と」

佳代「幻滅、じゃなくて絶望……かな」

悟「……」

虚しい表情の佳代。

○モノレール内

並んで座っている佳代と悟。

携帯を取り出す佳代。

佳代「これが兄さんの携帯。履歴とかメールをチェックして、重要人物を7人ピックアップしたの」

発信履歴などを表示させる佳代。

佳代「最初、私の携帯からかけて、事情を話して、話を聞いたらそれでオッケー。聞けなかったりしたら、この兄さんの携帯から悟さんがかけて、その声とテクニクで揺さぶって、真実を話してもらう」

苦笑いの悟。

佳代「中々、やるでしょ、私」

○公園

静かな公園のベンチ。

電話をかけている佳代。

佳代「あの、私、神波翔平の妹なんです
が、兄について話を聞きたいと思いまし
て……。え？ はい、いいですか？

今○○公園にいるんですが、お近くです
か？……。はい、来ていただけ……。
助かります。はい、奥の方の丘の上のベ
ンチにいますので」

× ×

電話をかけている佳代。

佳代「いえ、そうじゃなく」

携帯「何？ なんで妹がしゃしゃり出てき
てんの？ 本人だしなよ」

佳代「兄は死にました」

携帯「え？……。マジで。嘘つき翔平、死
んだの」

佳代「はい」

携帯「殺された、とか」

佳代「いえ……。自殺です」

携帯「うわ……。」

佳代「うそつき翔平ってなんですか？」

携帯「いや、あいつ嘘ばっかついてたか
ら……。いや、死んだ人間の悪口を言っ
ちゃいけないな。うん。忘れることにす
るよ。忘れることにします。貸した金も
いりません。じゃあ」

切れる携帯。

茫然自失の佳代。

× ×

兄の携帯から、悟がかける。

悟に耳を寄せて、会話を聞いている
佳代。

携帯「もう縁切ったっていったら。かけて

くんなよ」

携帯をかけている悟。

悟「ごめん、悪かった。謝るから、もう一

携帯「よお、翔平、久しぶりだな」

度会ってくれないかな」

悟「お久しぶりです」

携帯「やなことった。もう、二度とかけてく

携帯「なに、バイトの申し込み？」

んな、バーカ」

悟「はい」

速攻、切れる携帯。

携帯「前も言ったけどさ、チーム組むやつ

首を横にふる悟。

とか、人と協力してやるバイトは、翔平

× ×

苦手なんで、中々紹介できないんだよね。

兄の携帯から悟がかける。

だから時給安くなるのしかないけど良

何度かけても話し中でつながらない。

い？」

悟「これ、たぶん、着信拒否されてると思う」

悟「ええ、それでいいです」

うなづく佳代。

携帯「今日はやけに素直だね」

× ×

悟「金に困ってます」

さつきと同じく話し中の音が虚しく

携帯「君はいつも困ってるだろ。借金だら

響くだけの携帯電話。

けだし」

× ×

悟「へへ」

携帯「一週間まるまる拘束で12万つての

があるけど、どう」

悟「いや、それは」

携帯「だよねえ。言ってみただけ。・・・う

ーん、やっぱ今、ないな。安いのもないや。

悪いけどまた今度ね、じゃ」

切れる携帯。

× ×

携帯をかける悟。

携帯から女の声が聞こえる。

携帯「翔平？」

悟「ああ」

携帯「生きてたんだ・・・良かった。自殺

したって聞いて、びっくりして、・・・良

かった」

悟「でも、自殺はしたんだ。失敗しただけ

なんだ」

携帯「でも、ぜんぜん違う。ああ、ほっとした。

ほら、死ね！って言っただけ、死なれたん

じゃ、やっぱりね・・・」

悟「俺、何をしでかしたの？ 実はさ、ミ

スった日から数日の間の記憶がなくてさ」

携帯「しでかすも何も、ずっと嘘ついてた

のばバレて、私が切れたの」

悟「嘘？」

携帯「戸籍上の親が、本当の親じゃなくて、

大学の学費を振り込んでもらえないって

嘘」

悟「俺、そんな嘘ついたっけ」

携帯「あはははは。つーか全部ウソじゃん、

あんたの言っただけのこと。北海道の知事の

隠し子だとか、養子で来たのにその後

妹が産まれて、親からいじめられて育ったとか。つーか、地元でも嘘つき翔平で有名だっただろ。地元の奴がみんな教えてくれたんだよ。・・・でもさ、生きててよかつたよ。もう、自殺なんかするなよ翔平」

切れる携帯。

× ×

無言の二人。

向こうから一人の男がやってくる。

男、携帯を取り出し、電話をかけている。

佳代の携帯がなりだす。

男、佳代の仕草で相手とわかり近寄ってくる。

佳代「すみません、兄との関係を教えてい

ただけませんか。何も知らなくて」

本庄「大学の同級生で本庄といいます。あいつ、また何かしでかしましたか？」

佳代「あの・・・二ヶ月前に、自殺したんです」
本庄「・・・え？・・・あいつが？ まさか」

佳代「それで、なんで死んでしまったのか、知りたくて、携帯に記録されてる番号にかけて、いろいろとお話を聞いているところなんです」

本庄「妹さんですよ。家ではどういうお兄さんでした？」

佳代「優しくて・・・頼り甲斐のある兄でした」
本庄「じゃあ、知らないほうがいいかもしれませんよ。その思いのままでもいいじゃないですか。どうせ、他の人に聞いても、ろくな話は聞けないと思いますし」

佳代「嘘つき翔平って、どういう意味ですか」
本庄「まあ、なんというか、例えば4人の
仲間がいるとするじゃないですか。あい
つは、嘘八百をならべて陰口をいうん
です。それで自分の立場を少しでも良くし
ようと試みるんですよ。でも、一ヶ月く
らいならなんとかなるんでしょうけど、
さすがに三ヶ月くらい経つとね・・・全
部ばれて、あいつは陰口ばつかな、つ
てことになって。それに金にだらしな
い・・・てのもね。友達は一人もいな
かったと思うよ」

茫然自失の佳代。

本庄「昔ね、お前、どうして嘘ばつかつく
んだって聞いたたら、生まれつきだってい
うんだ。お袋や親父、妹は簡単に騙せん

のに・・・世間一般はやつぱり難しいな、
って自虐的に笑ってた・・・そうか、自殺か。
なんかあいつらしくないな・・・どっか
で生きてるってことないの？」

うなずく佳代。

本庄「そっか・・・じゃ、用事あるんで、
失礼します」

去っていく本庄。

しばし沈黙の二人。

口を開く悟。

悟「俺と同じだ」

悟の顔を見る佳代。

悟「全く、俺と同じだ」

佳代「違うと思う」

首を横に振る悟。

悟「嘘ばつかり、嘘をつかずにいられない」

佳代「今はついてないよ」

悟「違いは、お母さんに出会ったから」

佳代「うん」

悟「君とお父さんと出会ったから、なんとかギリギリで踏みとどまっていたに過ぎないんだ」

佳代「・・・きつと、私の出生の秘密についても嘘なんだろうなあ」

悟「お母さんが、佳代さんのことを嫌ったのも、きつと翔平君にコントロールされていたんだね」

佳代「・・・一気に疲れちゃった」

悟「うん」

佳代「今日のことはお父さんとお母さんには黙っていてね」

悟「言えないよ」

うなづく佳代。

佳代「言えないよね」

悟「函館に戻りたいな」

佳代「うん」

悟「帰ろうか」

佳代「うん」

○東北本線

鈍行列車。

のんびりとした車窓が流れている。

黙ったまま、二人、列車に揺られている。

悟の携帯に電話がかかってくる。

携帯を見る悟。

佳代「母さん？」

うなづく悟、そのまま携帯をポケッ

トにしまう。

佳代「出ないの？」

悟「電車の音、聞かれたくない。今、僕は、

遠い外国にいることになってるから」

○仙台駅

タクシーに乗り込む二人。

○ホテル

眼下に夜景が広がっている。

二人、浴衣姿で眺めている

佳代「いつまでいるつもりなの、函館に」

悟「ずっといたいと思ってる」

佳代「本当に？」

悟「僕は、もう君とお母さんからは離れな
れないと思うんだ」

そして、佳代を抱きしめる悟。

なすがままにされる佳代。

× ×

朝。

朝日が、部屋を照らしている。

ベットの上の佳代。

窓際で、携帯で電話している悟。

悟「へえ、そうなんだ。一週間も行ってる

んだ。・・・それは確かに新婚旅行と一緒

だ。母さん的にはどうなの？ 柴田くん

は？・・・意外といいやつだった？・・・

それは、よかった」

○東北本線

ゆるやかに流れ行く車窓。

向い合って座っている二人。

佳代「今朝の電話、楽しそうだった」

悟「そりゃ、楽しいよ。嘘もホントも全部

ごちゃまぜで、好き勝手に話してるから」

佳代「ちよつと妬ける」

悟「でも、この嘘つき野郎な自分の先にあ

るのは、身の破滅だからね」

佳代「うん」

悟「だから、僕は、もうなるべく話さない。

松じいみたいに生きてくんのだ」

佳代「悪くないね、それ」

悟「悪くない」

佳代「あなたの兄さんの成りすまし、この

まま消えていくの？」

つまらなさそうに頷く悟。

悟「来年の、翔平君の命日を最後の日にし

ようと思ってる」

佳代「そっか」

○松じいのイカ飯工房

イカ飯を作っている悟。

松じい、作業場の奥にガラス張りの

新しい部屋を作っている。

中で、生キャラメルを手作りで作っ

ている。

弁当のパッケージ。

『松じいの生キャラい飯』。

作業場の奥で、イカにご飯を混ぜた

生キャラメルを詰めている。

佳代モノローグ「このわけのわからない新

種のイカ飯弁当が、ゲテモノ土産として

テレビで何度も紹介されて、売れていた。

松じいは、引退を撤回した」

○神波家

台所。

仲良く、料理を作っている佳代と佳苗。

佳代モノローグ「母とは、随分仲がよくなつた。結局、私自身が兄の魔法にかかつて、母を無意識に拒絶していたのだから。母さんは、彼氏が出来て、私が変わつたと勝手に判断していた。それはそれで半分正しいので、訂正することもなく、そのままにしておいた。そして、兄の死から一年が過ぎた」

○函館の街

商品を手軽自動車で運んでいる遼平。

イカ飯を作っている松じいと悟。

佳代モノローグ「悟君は、ゆっくり一年かけて母さんとの別れを準備していた。母さんは、今、息子が地球のどこにいるかも把握していなかった。どこか遠くの外国で、違う名前で新しい家族と暮らしている」と信じているようだった。悟君は、もう世間話をする事もなく、死が匂い立つギリギリの言葉を、母の無意識の領域に語りかけるように話していた。私は、いつも彼の隣で、彼の母への言葉を涙して聞いていた。そして最期の日が訪れた。兄の一周忌。父と私は、緊張していた。恐らく母は、取り乱すだろう。どうやってなぐさめればいいのか、わからない……

どうすればいいのだろう」

○神波家 台所

食事をしている親子三人。

佳苗の携帯が鳴る。

すこし躊躇して、その場で電話に出る佳苗。

佳代モノローグ「母が、私達の前で、この電話に出るのは初めてのことだった・・・私は、緊張した」

佳苗「ああ、一ヶ月ぶりね。どうしてたの・・・ああ、そう・・・うん。・・・これが最後のね・・・。大丈夫よ、寂しいけど、なんとかなるわ・・・ええ。・・・なんとなく、今日が最後かなって思ってたのよ。だから、心の準備してたから・・・」

そういう佳苗の両目から突然、涙が溢れてくる。

佳苗「さようなら・・・いままで電話くれてありがとう。・・・うん、さようなら。お元気で・・・」

佳代、部屋を飛び出す。外で号泣している佳代。

携帯を切る佳苗。

穏やかな表情で、しかし涙が止まらない。

そのまま、遼平の胸に静かに顔を付ける。

遼平、佳苗の頭に優しく手を載せる。

おわり

本電子書籍は、2012年11月30日発行の『第18回函館港イルミネーション映画祭2012 第16回シナリオ大賞・受賞シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第18回函館港イルミネーション映画祭2012
第16回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

嘘つき兄さん

作：斎藤 清貴

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2013年4月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
